慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160−8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時〜午前11時
●電話＝3353−1211（大代表）

KEIO 150
Design the Future

# 平成19年度専修医採用

## 有給者枠数は240名に増加

信濃町で現在進められている診療クラスター構想を基盤として、新しい病棟建設とその基本となるグランドデザイン作成を鑑み、将来の信濃町キャンパスを世界に誇ることのできるメディカルタウンとする構想を達成するためには、原動力となる優秀な多くのマンパワーが必須である。

そのため、有給者の年俸は十八年度に比べて低下したものの、平成十九年度以降は塾の協力により、四年間の専修医期間を通じての有給者枠数を二百四十名に増加させ、一層多くの専修医を確保できる制度を樹立して、対策をとることができた。

平成十九年度は四月の時点で、一年次専修医百六十四名を含む、二百二名の専修医を採用し、受け入れることとなった。内科学、小児科学、外科学がトップ三で、昨年に比べて伸びが大きいのは小児科学、麻酔学であった。不足が社会問題化している産婦人科も昨年よりは減少したものの、七名が採用されている。

慶應での専修医過程は、各領域の専門医としての教育に加え、診療クラスターでの横断的教育、基礎的研究、臨床研究も視野に入れた、幅広い教育システムをさらに充実していくことが進められており、一層多くの専修医確保が望まれる。

ちなみに、今回一年次の専修医として採用した平成十七年度卒業（八十四回生）のうち、慶應の専修医、大学院生としての採用率は八十九％であった。

| 所　属 | H19年度採用者数 | | H18年度採用者数 |
|---|---|---|---|
| | | 内1年次 | |
| 内科学 | 33 | 21 | 33 |
| 外科学 | 25 | 18 | 27 |
| 麻酔学 | 15 | 15 | 8 |
| 整形外科学 | 17 | 15 | 15 |
| 形成外科学 | 6 | 5 | 6 |
| 小児科学 | 26 | 23 | 16 |
| 産婦人科学 | 7 | 4 | 18 |
| 眼科学 | 13 | 12 | 11 |
| 皮膚科学 | 10 | 8 | 11 |
| 泌尿器科学 | 5 | 5 | 5 |
| 耳鼻咽喉科学 | 5 | 2 | 7 |
| 精神・神経科学 | 18 | 16 | 19 |
| 放射線科学 | 5 | 5 | 7 |
| 歯科・口腔外科学 | 6 | 6 | 6 |
| ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学 | 5 | 5 | 2 |
| 救急部 | 6 | 4 | 6 |
| 病理診断部 | 0 | 0 | 0 |
| 中央臨床検査部 | 0 | 0 | 0 |
| 輸血・細胞療法部 | 0 | 0 | |
| 漢方医学 | 0 | 0 | |
| 総計 | 202 | 164 | 197 |

# 出生体重265g女児 日本最小で元気に退院

## ―慶應病院の新生児医療―

慶應病院において昨年十月二十五日に帝王切開にて二百六十五グラムで出生した超低出生体重児の女児が四月三日に体重三千二十グラムまで増加し、無事退院したことが新聞等で報道されました。国内で生存退院した児の中では最も小さく、世界でも二番目に小さい新生児です。

過去十五年間の先進国における新生児医療のレベルは飛躍的に向上しています。特に日本の新生児医療のレベルは超低出生体重児の生存率をみても世界で一、二を争うレベルといえます。しかしそのような中にあっても、五百グラム未満の新生児の救命は未だ非常に困難で、死亡率が高い状況です。当院小児科新生児部門では、院内感染のコントロール・呼吸・循環管理や栄養管理に工夫をかさね、妊娠二十五週、二百六十五グラムで出生した児を救命することが出来ました。

慶應病院の新生児病棟は、NICU六床、GCU十二床と中規模な施設です。昭和二十九年竣工、築五十四年を迎える七号棟の五階にあり、ハード面では決して立派とは言えません。そのような中、私たちは一九九九年にも妊娠二十三週、二百八十九グラムで出生した児を救命した実績があります。当時立ち会ったスタッフが今回の救命時にも残っており、以前の治療経験を今回生かすことが出来たと考えています。

もちろん、今回の成果は小児科のみの力ではありません。田中守講師率いる産婦人科周産期グループによる適切な母体管理、娩出時期・娩出法の決定が児の救命にあたり、不可欠な要素と考えられました。このような診療科を超えた連携が今回の成果に結びついたものと思います。

周産期医療の領域において世界のリーダーになるべく、今後も研鑽を積んで行きたいと思っております。

（北東　功　児74回）

## 医療人ＧＰ

# 「新たな複合研修による質の高い医療人養成」の紹介

### 小児科教授　高橋　孝雄

文部科学省はGood Practice（GP）事業の一環として「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム（医療人GP）」を平成十七年度から公募している。昨年度からは本塾医学部小児科・産科・救急部の提案した「新たな複合研修による質の高い医療人養成〜産科・小児科・救急医療に関わる新たな診療形態の創出による人材育成と女性医師の登用」プログラムが採用・実施されているので紹介する。

慶應が獲得した補助金は年間二千九百万円で、三年間にわたり支給される予定である。慶應のGPプログラムは、問題解決能力の高い新卒医師の育成と、新たなキャリア・パスの提供・働きやすい職種創出による既卒女性医師の登用により、小児科・産科・救急医学を担う人的資源の確保をねらうものである。小児科＋産科または小児科＋救急医学を研修する「周産期専門複合研修」、「小児救急を包含するER型救急専門医研修」を設けて、複数分野を同時に担うことができる人材を育成するとともに、「周産期コーディネーター」「小児慢性疾患コーディネーター」という女性医師が勤務しやすい分野を創出し、家庭を持つ女性医師の活躍を促している。プログラムの実施に際しては、web-based trainingの提供や遠隔医療支援システムの活用などのe-ラーニングの手法により、大学教員と地域関連病院の指導医との連携や医学生・初期研修医・専門研修医を通じた一貫教育を円滑に進めている。

同様に医療人GPプログラムを実施している他大学との意見交換を促進するため、平成十九年二月二十日には、信州大学医学部の福嶋義光教授、佐賀大学附属病院医療情報部の高崎光浩助教授を迎えて、シンポジウム「地域の特性に配慮した効果的医療人養成のための新たな試み」を開催した。まず相川直樹・慶應義塾大学病院長からお言葉をいただいたのち、慶應GPプログラムの総責任者、小児科・高橋孝雄が本シンポジウムを三大学合同で実施する意義について概説した。引き続き小児科・福島裕之卒後研修担当医師が慶應におけるGPプログラムを紹介したのち、福嶋教授により「地域医療人育成センターを中核とした地域偏在・分野別偏在解消の取組み」、高崎助教授からは「医療人教育におけるe-ラーニングの効果」について、それぞれご講演をいただいた。さらに慶應のコーディネータープログラムに参加している女性医師からの成果についての具体的な説明に続き、プロジェクトの今後の方針について活発な意見交換が行われた。

慶應義塾大学病院内で開催したこのシンポジウムは、インターネットテレビ会議システムを導入し、遠隔地（信濃町・川崎市立川崎病院・宇都宮済生会病院・オランダユトレヒト大学）にも中継を行い、地域医療を担当する指導医・専修医とも同時・双方向に討論を進めることができた。男性・女性それぞれの特性を生かした医療の分担や遠隔医療支援システムを利用した生涯研修・相互学習の充実など、医師の新しいキャリア・プランニングのあり方について示唆に富むシンポジウムとなった。

（61回）

2月20日、慶應大学病院内で行われた医療人ＧＰに関するシンポジウム。この様子は遠隔地にも中継された

## 厚生労働省の今①

# 厚生労働省医官の今後の役割と期待

### 厚生労働省技術総括審議官　西山　正徳

医師の本来業務はむろん医療を提供することである。また、基礎医学の研究に邁進しておられる先生も多い。ただ、「医学」を用いて患者に「医療」を提供するためには、人材養成・組織規定・支払い方策など、制度的側面を整備する必要がある。われわれ三四会員の中にも、霞ヶ関の厚生労働省で、こうした制度的側面と取り組んでいる一群の医師たちがいる。今回から三回にわたり、こうした医師たちの横顔を紹介したい。

### 25年間で医官数は2・5倍に

厚生労働省には現在二百名の医官がいる。昭和五十六年に私が入省した時は八十名弱だったので約二・五倍の増加である。また、出身医学部は五十七校にも及び、我が国最大の医局と言われる所以である。この医官数の伸びは、国民の健康問題や社会保障に関する関心の高さを背景にした需要の増大である。

医官の需要は、WHOや世界銀行、グローバルファンド等国際機関や大使館への派遣、県や指定都市等地方自治体からの要請等増加している。一方、供給自体が不足し、かつ途中脱落者が後を絶たないため常に医官不足状況にある。現時点でも二十五名程度の欠員であるが、これを何とか大学との交流人事によって賄っている状況である。

### 最近のトレンドは国際保健行政

毎年秋には医官の採用試験が行われる。臨床訓練制度導入のため、卒業直後に入省することはできない。卒業後おおむね五年程度までの医師が採用希望してくる。採用枠は十名程度なので、毎年二〜三倍の競争率となっている。志望動機には様々なものがあるが、最近多くなっているのは国際機関で働きたいとする希望者の増加である。WHOを例にとると、WHOにおける日本人の適正数は百二十〜百六十名と試算できるが、現員は四十名である。圧倒的に少ない。その分、欧米人によって占められており、国際保健政策も、日本色が出せないことにつながっている。つまり、日本は自国においては世界最高水準の医療制度を確立したが、地球規模での貢献というとNothingと言っても過言ではない。我が国の大きな問題の一つである。

### 国際標準確立のための医官への期待

医師不足や医療事故等マスコミを賑わせない日は無い。日本は素晴らしい医療制度を確立したが、それでも様々な問題を抱えている。その解決のキーワードは「国際標準」である。先進諸国と比較すると、病院ベッド数の多さ、医師や看護師数の少なさ、入院期間の長さ、人工透析導入数の多さ、移植の少なさ、医薬品の審査の長さ、放射線治療の少なさ等枚挙に暇がない。我が国固有の文化があるにしても、一刻も早くこれらの原因を究明し、国際標準に近づける努力が必要である。そのために、国際感覚あふれる医官が大量に必要な時代である。

医官になるには、専門領域の知識はもとより、非専門外医学や行政法・地方自治法等法律学、また、医療経済学や統計学なども勉強しなければならない。後進の多くの医師が、これらの国内外の諸課題に関心を持ち敢然と挑戦することを期待したい。

（56回）

※厚生労働省では新しい医系技官を募集しています。行政の仕事に興味をお持ちの先生、学生さんは、お気軽に御連絡（医政局国立病院課　井口豪・83回　inokuchi-tsuyoshi@mhlw.go.jp）ください。また今夏には説明会も予定しています。

# 信濃町リノベーション〈第14章〉

# 将来的組織像の全景について

### 医学部長補佐　相磯　貞和

かつて世界的な業績を上げられ帰国された北里先生を待っていたのは、国と官学の冷淡な対応であり、そのような状況に救いの手を差しのべられたのが福澤先生でした。お二人の間で築かれた強固な信頼関係が今日の我々の基礎となっていることは、皆様ご承知の通りですが、お二人に共通して持たれていたのは徹底した「社会の為にある学問・医療」という考え方でした。医学部が現状を打開する方策は決して単純に、一部の制度改革などで解決出来るものではありませんが、福澤先生と北里先生のお二人に共通した「社会の為にある学問・医療」という理念に立ち返って、我々の将来を切り開いていかなければなりません。そのような認識に立って本稿においては、医学部の機能である「教育」に焦点を置いて本学の将来像の全景のあり方について私見を述べさせて頂きます。

### 一、教育

これまで「教育」とは主に卒前教育を想定したものでしたが、初期臨床研修制度の導入以後、我が国の医学部卒業生から後期臨床研修医までその流動性は高まっております。このような状況の中では、これまでの考え方を転換し、それぞれのキャリアレベルでの教育内容をブラッシュアップし志願者に魅力的なものとし、各レベルで優れた人材を得て教育し、社会に還元することが今後組織として一層強く求められていくでしょう。

卒前教育においては、慶應医学を継承する人材の育成の基本として、現在カリキュラム委員会が新たなカリキュラムの策定作業にあたっていますが、臨床家としての思考のスキルとツールを効率的に教育する一方で、医学を構成する学問体系を学生に提示しつつ、自由な発想で医学研究に関わる場に学生を置くことを考えております。当然出来上がってくるプログラムは「医師の育成に特化した」カリキュラムとは異なり、特色を持った国際的MDPhDプログラムを始めとし、多様性、効率的、伝統的という自己矛盾とも聞こえるキーワードを内在したものとなることでしょう。

一方、卒後教育の内容としてはそれぞれの学問領域診療科での正統的な教育を基本としながら、現在申請しているがんプロフェッショナルの教育、昨年度より開始された臨床研究人材養成などをはじめとし、予防医学領域、基礎研究領域においても、社会の求める領域を先取りした形で幅広く人材を養成し供給する仕組みが求められることでしょう。その中には、大学院の仕組みを変えて、従来の基礎研究を主体とした大学院から、実務教育に対しても主体的に機能する大学院、また、大学院全体として教育する仕組み（例えば、エシックス、コンプライアンスなど）の導入を必要とするものが出てくると思われます。

これらの教育機能に関しては、卒前教育を担当する教育統括センター、初期研修を担当する卒後臨床研修センターが本学に置かれておりますが、それらの一層の充実と連携を図り、さらに専修医教育の調整を図る機能をもそこに負託して一貫した教育統括を担当する部門によって効率的な教育リソースの活用と調整の機能を果たすことが必要でしょう。

### 二、研究・診療からみた教育

我が国の一般的な傾向として活発な基礎研究に比して臨床研究領域での成果が挙げられていない事は社会的にも大きな問題となっています。幸い昨年度より厚生労働省の基盤整備事業が始まり、多くのナショナルセンターが補助を受ける中で本学が唯一の教育機関として選ばれ、学内にクリニカルリサーチセンターを設立することが出来ました。これによって、本学において治験と臨床研究を包括的に扱い、さらに他医療施設とともに臨床研究ネットワークを構築する準備が整いつつあり、このセンターを通じて臨床研究に関わる多様な人材養成が始まっております。更に、本学において現時点で十分カバーし切れていない研究分野は予防医学であり、現在建設予定中の予防医療センターを中心として、個人・社会・企業との連携の下に新たな一次二次三次予防医療の研究と実践を開拓していく仕組みと、それを通じて将来的に地域職域など従来より広い医療活動の場で予防医療の概念をもった人材を養成していかなければなりません。

なお、薬学・看護・理工学・情報・政策・経営などの医学医療と関連する分野の他学・他病院との連携した研究診療のプラットフォームと、基礎臨床横断的に基礎研究からトランスレーショナルリサーチまでをパイプラインとして持つ研究コンソシアムを恒常的に維持するメカニズムは研究機能のみならず、その場での人材養成が将来的な基礎医学研究者や他領域との融合研究者の養成に直結するものです。更に、一年来提案されてきた多数の診療クラスターについても、単なる診療単位として捉えることなく、研究・教育をも併せた機能を持つことが期待されます。

### 三、まとめ

以上に述べた事をまとめると別図のようになります。財政・人事の安定的恒常的維持を担保されたコア部門（教室・部門）から、教育・研究・診療の機能が融合された様々なクラスター・センター・プロジェクトが作り出され、それぞれのクラスターやプロジェクトにおいては、明確にされた収支と成果に基づく公正な評価に応じて人事とマネジメントを弾力的に調節するメカニズムが導入されることが想定されます。一方、それぞれの機能についてはいくつかのセンターによる効率的なリソース活用と調整機能が発揮されることになります。このように本学の将来は、学問体系を維持したコアと、先端性と革新性を兼ね備えた教育研究診療の融合したフレキシブルな組織との複合体が、複合的合目的性を備えたセンターガバナンスの下で運営される組織へと進化すべきであると考えております。

（教授　解55回）

2007年4月6日〜8日

## 第27回日本医学会総会

### 「いのち・ひと・夢」をテーマに大阪にて開催

最終日の特別シンポジウム「医学教育・医療制度改革」についての討論に、当学部の鳥居秀成君（眼83回）が研修医代表のシンポジストとして壇上に。関連記事２面

## 鑑往知来

この連休中に福澤諭吉先生の生涯に関する本を読んだ。多くの三四会員の方はご存知であろうが、疾病、医療に関わる記述を少し。

ご自身は、五歳の時に天然痘を患い死線をさまよったという。二十一歳の時に腸チフスに罹患し適塾の恩師緒方洪庵氏に助けられ、さらに三十五歳の時に発疹チフスに罹患し死線をさまよっている。当時は、どの病気も多くの方の命を奪ったため、慶應義塾創立、存続は伝染病に3度も阻まれかかっていたことになる。明治六年、三十八歳の時に、英語で医学が学べるようにとイギリス医学に範をとる慶應義塾医学所を開設した。残念ながら七年ほどで経営難から廃止のやむなきに至るが、三百余名の卒業生は慶應医学の先駆者と言えるだろう。明治二十五年五十七歳の時には、ドイツ留学から帰国した北里柴三郎氏のために私財を投じて芝に伝染病研究所を建設し、支援し続けたこと、北里研究所の前身である結核療養所の設立を進めたことは医学部新聞の二月号で北里一郎氏が詳しく述べている。

福澤先生が何度も伝染病で死線をさまよったという経験が、医学所の開設、北里氏の支援という形になり、それが後の医学部設立（医学科復活とも言える）につながったことを知り、現在勤務している医学部、病院がその流れの中で存在していると思うと、なにか熱いものがこみ上げてきた。

慶應義塾自体も何度かの大きな経営危機、官からの圧力などを義塾社中の必死の努力で乗り越えてきたことが、現在の我々へつながっていることを改めて考えると、その歴史の百四十九年目を義塾の中で歩んでいることの重みを強く感じる。

義塾の中でもとりわけ優秀な人材を誇る医学部、病院で働く社中が、現在行われている信濃町リノベーションを着実に実行することで、その名を高め、後輩社中に多くのことを引き継ぐことができ、歴史のつながりをより素晴らしいものにしていくと確信している。

（中川種昭　歯64相当）